

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	平山 草太
論文題目	カメルーンにおけるイスラーム関連書物の利用		
(論文内容の要旨)			
<p>本論の目的は、カメルーン共和国のムスリムが書物に対してどのような関係を取り結んでいるのかを記述し、その特徴と広がりを検討することである。</p> <p>第1部の第1章は、西・中部アフリカのイスラーム研究に大きな影響を与えた、クルアーンの「身体化」という概念とその受容史の批判的検討から出発する。続いて、イスラームの人類学における「我々はいかにしてイスラームを見いだしうるのか」という議論をレビューした。そしてこれらがともに、カリグラムの書物観に基づくことによる限界を指摘し、読書史研究における「領有」概念を鍵として新たな書物観を探究する必要性を主張した。第2章では、カメルーン共和国の言語や宗教の分布等の基礎情報、及びチャド湖周辺地域からカメルーン南部地域にイスラームの影響力が拡大した歴史的経緯を概観した。第3章では、首都ヤウンデにおける「スーフィー」と「スンナの民」の紛争について、その分断を可能にしたモスクに注目して記述・分析した。</p> <p>第2部はヤウンデのイスラーム書店で見られる書物観について論じた。第4章では、イスラーム書店を経営する一族、書物の輸入や販売ルートなどについて民族誌的記述を行い、ナイジェリアのカノを中心とする書物流通圏の周縁部にヤウンデが位置づけられることを示した。第5章では、ヤウンデ最大のイスラーム書店にて在庫書籍の全数調査を行い、そこでの書物の「領有」実践は、単にその書物が読まれることに留まらず、その書物の造形的「形式」の画一性を保ったまま拡散していくことだと論じた。さらに第6章では、書物の「形式」と「内容」が相互反動的に結びつく関係を分析した。加えて、「カノ書物圏」の周縁というヤウンデの地理的・歴史的条件が、書物の造形的「形式」を押し広げるような「領有」実践を導いていることを論じた。第2部の結論では、その「形式」の特徴は、造形的表象としての性質と言語的対象指示としての性質が、つねに同時に与えられるという点にあることを示した。</p> <p>第3部では、こうして得られた書物観を、カメルーンにおける様々な書物の「領有」実践に重ね合わせ、その記述のモデルとしての適切さを検証した。第7章では、主にクルアーン学校でのアラビア文字学習の方法を記述した。ここでは、文字の読み方自体よりも、読み方を学ぶための身体的な振る舞いに習熟することを重視する。それは、大人たちの「読書」にも共通する態度である。第8章では、ムスリムによるアソシアシオンの設立実践を記述・分析した。この実践は、官僚制的な「想像力の偏極構造」を特徴とするライシテ体制のもとで、自己目的的なゲームになっている。さらに、その実践の中心にある定款は、「コピペ」でつながる非表象的な定款のネットワークに組</p>			

み込まれることにおいて／として作成される。第9章では、クルアーンの文字を使った「呪術」の特徴と、そこに見られる書物観について考察した。この「呪術」の特徴は、特定の方法で文字を一旦可視化したのち、それを物理的に操作し、もう一度不可視化することである。こうした「呪術」の過程は、文字が同時に持つ2つの「形式」に触れる方法として記述することができる。これは、先行研究のような倒錯的な「他者化」に走ることのない「呪術」観を導く。

終章では、本論の出発点であった「身体化」概念の問題に立ち返り、上記の記述モデルによる捉え直しを経ることで、造形的表象であると同時に言語的記号でもあるという書物観に基づく新たな研究の重要性について考察した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文が調査対象としたカメルーンは、自然的・社会的な多様性によって特徴づけられ、アフリカの縮図といわれることもある。カメルーンに住む人々の中でもムスリムは少なからぬ割合を占める。しかし、その歴史や社会的位置づけ、生活実態は十分に研究されてきたとはいえ、基礎的なデータの蓄積とその理解についての理論的枠組みの構築が求められている。こうした状況で本論文は、カメルーンのイスラームを特徴づける書物に対してムスリムの人々がどのような関係を取り結んでいるのかに焦点を置き、その問題設定、歴史的背景、記述の方法論（第一部）、ヤウンデのイスラーム書店から見えてくる「カノ書物圏」について（第二部）、カメルーン・ムスリム社会における「読書」の方法（第三部）についての厚い記述と分析を行ったものである。

本論文は、以下の3点においてアフリカ地域研究に重要な貢献を行っている。

第1の貢献は、詳細な民族誌的記述を通じて、イスラーム思想史とアフリカ地域研究をつなぐ議論を展開したことである。宗教家や宗教学者によって記された1次、2次文献の丹念な読み込みを通じてイスラーム思想の歴史的な変遷を明らかにし、その解釈の内面的理解に務める前者と現地での徹底したフィールドワークを通じて今まさに生きている市井のムスリムの生活世界を捉えようとする後者の間には、控えめにいっても交流が不十分な状況にある。これに対して本論文は、現代のカメルーンのムスリムによる書物の利用に注目した長期のフィールドワークを敢行することによって、2つの研究史を架橋する論点、例えばクルアーンの身体化、書物の領有（appropriation）、「書物圏」、クルアーン学校における文字利用、書物の呪術的利用といった論点を見出し、それらについて実証的かつ野心的な議論を展開している。

第2に本論文は、テキストの意味（内容）とそれを伝える手段（形式）という二項対立への批判を通じて展開してきたイスラームの人類学に対しても独自の貢献を行っている。すなわち、書物の領有というアプローチから、多くの人々と書物を始めとするモノがつながり、イスラームの世界を形作っていく過程を経験論的に明らかにするとともに、それについての鋭い考察を行っている。これは、様々なアクターの絶えず変化するエージェンシーのネットワークを記述・分析する人類学的な研究の優れたモデルケースとしても位置づけられる。本論文で提示した「カノ書物圏」の内実をさらに明らかにしていくことは、イスラームのテキストの内容と形式の関係についての動的な理解をさらに深めるであろう。

第3の貢献は、ムスリムによる書物の利用について周到に検討することで、現代的な知識観を再考する契機を与えてくれることである。例えば、第9章で論じられている知識の可視化（例：書板にクルアーンの文言を書く）、操作（例：それを水に溶か

す)、不可視化(例: 文言を溶かし込んだ水を飲む)という一連の過程は、宗教的に重要な知識を解釈するのではなく、その領有を促すという点で、個人が知識を学習することを通じて内在化し、それを様々な場面に応用することを促すという現代的な知識観とは、似て非なるものである。本論が提起している知識観には、まだ著者による推論(の積み重ね)の域を出ていない、得られた資料を説明するための比喻、あるいはモデルがまだ十分練られていない、といった問題が散見するものの、これからさらに実証的な資料の収集とその論証を展開していくことで様々な研究分野を架橋し、それぞれの研究分野でのさらなる議論を促すことが期待される。

このように本論文は、カメルーンのイスラームを特徴づける書物についての新しく、かつ重要な事例研究を行うことを通じて、アフリカ地域研究に優れた学術的貢献を行った。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものと認める。また、2024年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。